

Forward

ON/OFFを自分の中でメリハリを明確につけるようにしています。 — K・Y様(三重県 40代 男性)

Q 治療開始までの経緯を教えてください

A 左足痙攣と腰痛があり、整形外科を受診。その後、関西医大を紹介して頂き、最終的に脳神経外科へ。当初、髄膜種と診断を受けたのですがオペの2日前に膠芽腫と診断されました。左手の痺れもあり携帯電話も触れない状態に。病理検査結果後、経過が良ければ腫瘍治療電場療法を行うことになりました。



しても周りの目はあまり気になりません。子供は外出時に気にしているようですが、生きるために必須な治療と思っています。

Q 長く続けるポイントは何ですか

A 気合ですね(笑)。子供が小さいので頑張って仕事しないといけないし、再発させるわけにはいきません。最近はアレイを外していることが不安になるくらいです。また、先生から月間使用時間率を褒められるのもモチベーションになります。

Q 現状について教えてください

A 手術後、治療のため半年の休暇を取った後、現在は職場復帰しています。会社と上司の理解の下、パソコンでの業務をしています。午前8時半から2時間残業して午後7時半までガツツリ仕事をすることもあります。職場には予め治療に関する説明をしておいたので、エラー音やバッテリーの充電のため隣の席を空けるなど細かい配慮をして頂き本当に感謝しています。そのため仕事上での不便はありません。趣味は元々、趣味で登山、釣り、ガンプラ(「機動戦士ガンダム」のプラモデル)、ジム、スキー、ロードバイク等をしていましたが、病気になつた後は、もっぱら暖かい時期は釣り、それとガンプラを楽しんでいます。



Q 気持ちを前向きに保つ工夫は何ですか

A 最初は足のリハビリもあり、散歩をしている時は病気の事で、何で自分がこんな病気にならないといけないんだ…と悩むこともありましたが、今では治療をすることが日常のスタンダードになり気にならなくなりました。

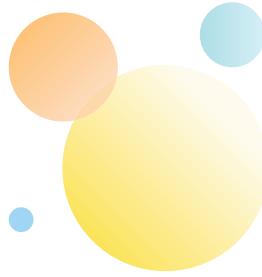
Q 治療の協力者(奥様)に上手くケアしてもらうために気をついていること

A 妻は仕事、育児、家事がありますので、シェービングを早くして、アレイの貼替えがスムーズにできるように気を使うぐらいでしょうか。

Q 困っていることは何ですか

A 生活する上では、もちろん本体の小型化、バッテリーの駆動時間改善やアレイからのコードが無くなる?減らせないか?等ですね。
(注:本体重量約1.25kg、バッテリー駆動時間は2~3時間、基本セット内に4本付属)

Forward



Q 治療の協力者（奥様）にお聞きします：
治療に関して説明を受けた後の印象はどうでしたか

A 見たことが無く大変な治療だと思いましたが、どちらかというと本人の受け止め方が気になりました。実際、腫瘍治療電場療法が始まるとアレイは毎日交換できるものと思っていたが、月間のアレイが40枚なので、それが出来ないためどうしようかと思っていた※。でも、主人が前向きに治療をすると決めたので、すごい誇らしいなあと。

(注：アレイは月間40枚の処方が健康保険の範囲内、週に2回程度の頻度での交換となります)

Q 治療を継続する上での工夫は何ですか

A 比較的、頭皮トラブルは少ない方ですが、あれば軟膏を塗っています。アレイの使用枚数を上手くコントロールすることにより、汗のかきやすい夏場は2日に1回交換し、皮膚トラブルを回避するようにしています。

Q 今後、治療を検討される方へのアドバイスをお願いします

A 患者様：
病理検査では、私は長生きする細胞を持っているらしいので治療は頑張りますよ（笑）。後、遊びに行く時はアレイを外してON/OFFを自分の中でメリハリを明確にけるようにしています。

奥様：
本人が生きたいという想いが強いなら治療にトライさせてあげるべきで、本人が決めるに全面的にサポートしてあげてほしいと思います。治療をすることにより、これから的人生前向きに楽しく、色々な経験ができれば素晴らしいことだと思います。

Doctor's Comment



名古屋大学大学院医学系研究科 脳神経外科
助教 **大岡 史治** 先生

**Q 腫瘍治療電場療法への意欲向上のため
に工夫されている点を教えてください**

A 膜芽腫と告知をされショックを受けた状態で治療を開始するため、定期的に行うMRI検査の結果と一緒に確認してもらい安心していくことで「腫瘍治療電場療法を続けていてよかった、大丈夫なんだ」と思ってもらうことが大切ではないかと感じています。

Q 今回の患者様を通して、気付きにつながったことがあれば教えてください

A 腫瘍治療電場療法をすることで、QOLやアクティビティを下げずに治療ができる事を実感しました。以前は、剃毛や機器を背負った状態が続くことで生活に大きな支障をきたすのではないかと思っていましたが、今回の患者様をみていると上記の点は誤解であったと感じています。「QOLを落とさずに治療できる」点を、今後膜芽腫の患者様に伝えていきたいと思っています。